親愛なる子供たちへ、

私たちは君たち皆の父親であり、母親であり、祖父であり、祖母でもあります。
私たちは行動を起こそうとしている市民であり、科学者でもあります。
私たちはこの美しい猪苗代で、一緒に働き、そして考えるために二日間集まりました。
私たちは、ここの自然の美しさに心を奪われています。大きな湖が見え、窓からは濃い緑の山々が見えます。
冬には多くのウィンタースポーツの愛好者が集まるとも聞いています。
私たちの多くは日本から来ました。そして多くが福島県から来ました。
また何人かは、飛行機に乗ってヨーロッパから来たのです。それはとても長い旅でした。

私たちがここに集まっている本当の理由は君たちです。
私たちは、君たちや君たちの子どもたちが、健やかに成長することを願っています。
君たちは皆あの大きな地震のこと、津波のこと、福島第１原発の事故のことを知っていますよね。あの時本当にたくさんの危険な物質が空気と海の中へ流れ出たのです。その物質は放射性です。見ることも匂いをかぐこともできない光を放っているのです。それが危険なのです。見えないから、深い水たまりをよけるようにその周りをよけて通ることはできません。この物質は地面に落ちて植物に入っていきます。動物がそれらの植物を食べ、その物質で汚れた水を飲みます。私たちがそのような植物や動物を食べると、この放射性の物質は、私たちの体に入っていきます。たくさんの動物や植物が病気になりますが、私たちもそのことによって病気になるかもしれません。私たちのうちの何人かは、今どのような食べ物を食べてはいけないのかを調べようとしています。とても大事なことです。

私たちは、誰もが息をしなければなりません。空気の中にも放射性の物質は漂っています。私たちが空気を吸って、この物質が肺の中にたまってしまうととても危険です。私たちは怒っていて、同時にとても悲しんでいます。
君たちに何を食べさせたらよいのかこんなに考えなければならないということに。
君たちと私たちが毎日吸っている空気について、こんなに考えなければならないことに。

君たちは、きっと聞くでしょう。そのように危険な物質を出す原子力発電所を、なぜ動かすのか？と。
同じことを私たちも考えています。答えはわりと簡単です。
それで沢山お金をもうけることができるからです。君たちも家にはコンセントや電気があって、もしかしたら何人かの家には温かい便座もあるでしょう。君たちの何人かは、あの早い新幹線に乗ったことがあるでしょう。日本では電気の一部が原子力発電所で作られているのです。みんな電気が必要で、そのためにたくさんお金を払うのです。そのことによって原子力発電所はお金持ちになるのです。だから原子力発電所は、彼らがなければ私たちは生きられないと言うのです。原子力発電所を動かしておかなければ、私たちは凍えてしまうか、暑くて大汗をかいてしまうと言うのです。でも、私たちが毎日必要としている電気を作る、たくさんのほかのやり方があるのです。日本ではそれらは特にうまくいくでしょう。逆に原子力発電は日本では特に危険です。原子力発電所は地震に弱いし、ほとんど全部が水辺に建っていて、そこには津波が来る可能性があるのです。

君たちの何人かは、きっともうチェルノブイリという名前を聞いたことがあるでしょう。チェルノブイリはウクライナにあって、そこで 26 年前、とても大きな原子力発電所の事故があったのです。放射性の物質は、空高くまで噴き上げられ、多くの国のたくさんの人に影響を与えました。運の良いことに、あの頃日本は、あまり影響をうけませんでした。あの頃私たちは、こんなことは 2 度と起こってはならない、と思ったのです。あの頃ヨーロッパで、私たちは自分たちの子どもたちに何を食べさせたらよいか悩んでいたのです。あの頃私たちはとても怒っていました。でも時間がたって、私たちはあの怒りを少し忘れかけていたのです。でも福島の事故がすべてを呼び覚ましたのです。

ドイツやほかの国々で、たくさんの人々が通りに出て抗議をしました。それによってたとえばドイツでは原子力発電所が止められることになりました。一度に全部ではないですが、ともかく止められることになったのです。

今、東京や大阪や日本のたくさんの町で、大きなデモが行われています。人々は、止められている原子力発電所は、止めたままにしておいてほしいと思っているのです。一度止まった原子力発電所が再び動かされようとしていることに反対しているのです。今、君たちのためにここに集まって話し合っていなければ、私たちもきっと彼らと一緒に通りに出ているでしょう。

私たちには残念ながら力が足りません。すぐに日本中の原子力発電所を止めるように命令する力は、私たちにはありません。でも私たちは、多くの人々が勇気をもって、原子力発電所について本当はどう思っているのか、大きな声で言ってくれることを願っています。君たちのお母さんは、君たちが公園で遊んでよいかどうか考えなければならないことを喜んでいると思いますか？何をお昼に食べさせたらよいか悩んだり、君たちがすでに放射線で病気になっているのではないかと心配しなくてはならないことを喜んでいると思いますか？お母さんが君たちを連れて安全な地域に行くときに、お父さんが、危険な地域に残って働かなければならないことを両親が喜んでいると思いますか？
どんな政府も、市民の意志に反して長い間統治することはできません。とても力を入れて何とかしようとするでしょう。
でも、君たちが大きくなっても、福島で起こったこと、君たちが経験したことは忘れないでください。
嘘を信じないでください。君たちの頭を使って考えてください。質問をしてください。
君たちは自分でできるよね。

私たちの力は小さいかもしれない、けれども、私たちはこれからもできる限り真実を探すと君たちに約束します。
そしてその真実について人々と分かち合っていきます。
私たちは諦めないと約束します。
たとえ私たちがやり遂げられなかったとしても、君たちがやり遂げてくれると信じています。
そうすれば君たちの子どもたちがいつか聞いてくるでしょう。
あのころの放射線ってなんだったの？と。
私たちの会議も終わりです。私たちは、君たちへのこの手紙についても話し合いました。
この手紙は、君たちと未来へのかけはしです。

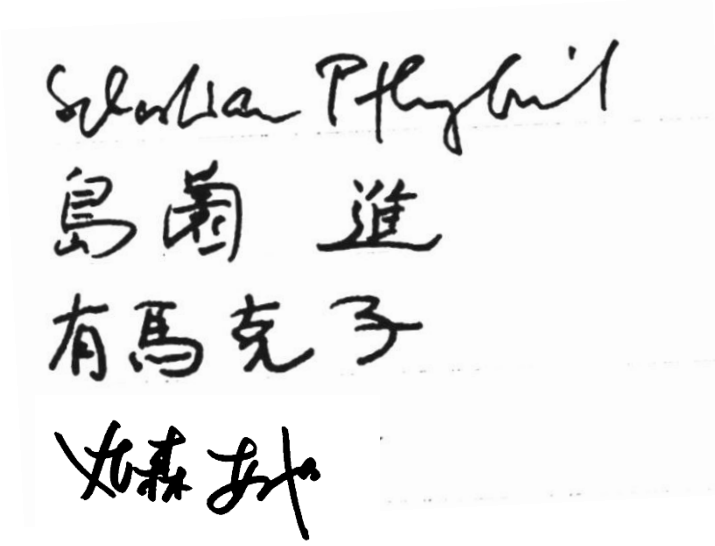
君たちがこのことについてどう思っているか、語り合えたらと思います。

心を込めて

市民科学国際会議
2012 年 6 月 24 日

セバスチャン・プフルークバイル
ドイツ放射線防護協会

島薗　進
東京大学大学院人文社会系研究科

有馬克子
福島県須賀川市滑川字東町 327-1

丸森あや
福島県福島市置賜町 8-8 パセナカミッセ1F